広島県大竹市小方

亀居城関連遺跡
見学会資料

平成26（2014）年11月15日（土曜日）

公益財団法人　広島県教育事業団

大　竹　市　教　育　委　員　会

1　位置と環境

本遺跡の所在する大竹市小方は，東に瀬戸内海に面し，西に急峻な山が迫る狭小な平野部に位置します。古代では，山陽道の宿駅・遠管（おくだ）駅が置かれたとされ，古くから交通の要衝でした。

関ヶ原の戦いの後，毛利氏が長門・周防に移封され，安芸・備後には福島氏が入国しました。福島氏は，領国を防備するため，安芸の西端に位置する小方に亀居城を築城しました。築城は慶長８（1603）年に始まり，慶長 13（1608）年に完成しましたが，慶長 16（1611）年に城は幕府の一国一城令により廃城となりました。調査区は，絵図によると城下町への入り口に当たる桝形付近に立地し，西国街道に面した平地です。なお，福島氏や元和５（1619）年に福島氏に代わって入国した浅野氏は，西国街道の整備に努め，玖波に西国街道の宿駅を設けました。玖波本陣は洪量館と称され，多くの文人が訪れました。

元治元（1864）年の第１次長州戦争に続き，慶応２（1866）年に第２次長州戦争が起こりました。第２次長州戦争の最大の激戦地は芸州口で，小方付近でも戦闘が行われました。幕府はこの戦いに敗れ，その権威を失墜しその後明治新政府が成立しました。

2　調査の概要

発掘調査は，一般国道２号改築事業（岩国大竹道路）に伴って７月 14 日から行っています。

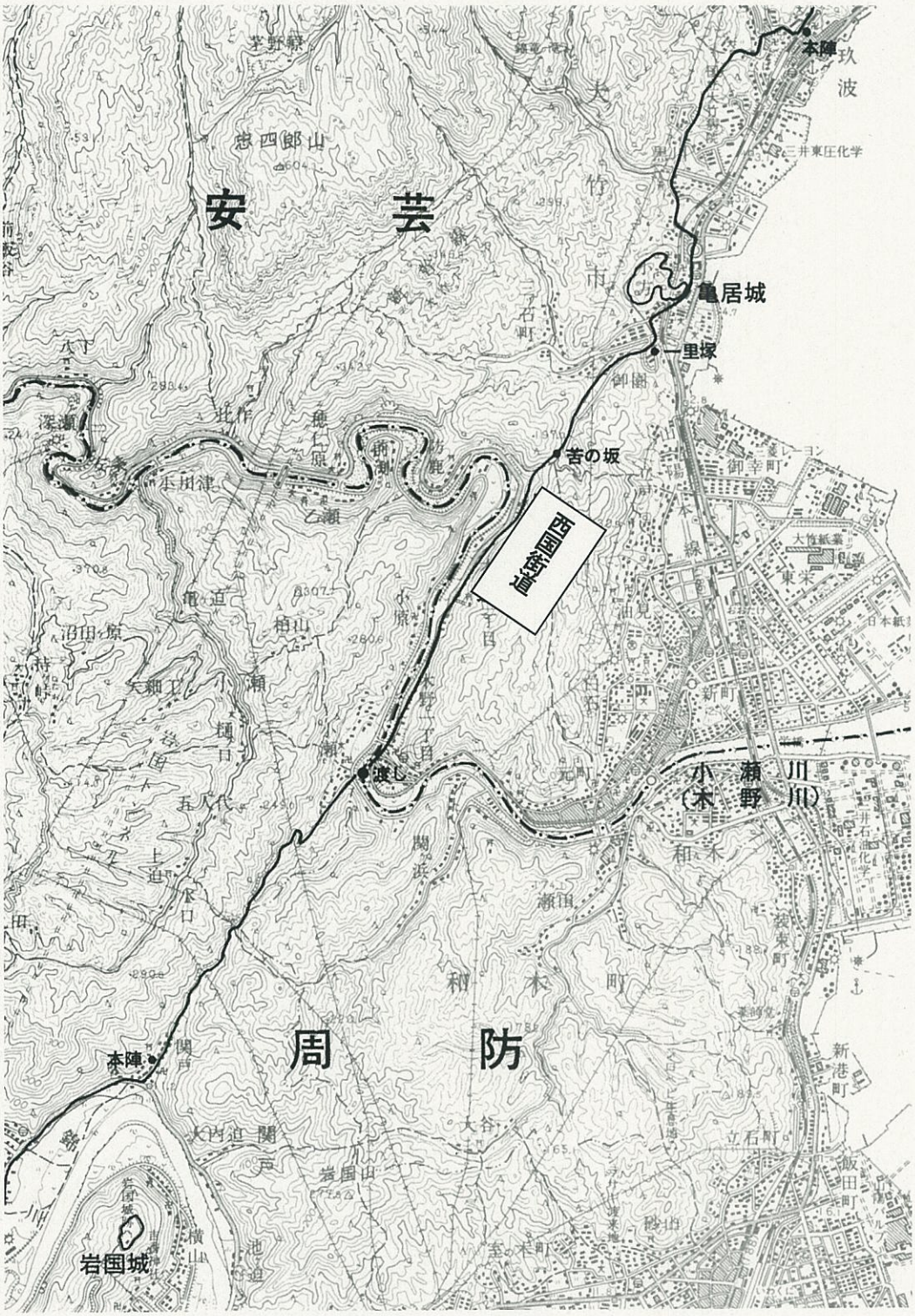
調査区は亀居城跡の東裾にあたり，東側は近世山陽道に面し南北に長いことから，20ｍごとに幅１ｍの溝状の穴（トレンチ）を設定し地下遺構の状況を調べました。調査は，調査区をＡ区・Ｂ区・Ｃ区に分けて，北側のＡ区から進めています。その結果，調査区の広範囲に渡り，焼けた地面や焼けた土で整地された範囲を確認しました。

現在までに，石組みの水路，区画のための石列，石垣，井戸と思われる穴，壁や底に粘土を貼った穴等を検出しました。また，遺物では，碗や皿等の陶磁器，古銭や釘等の金属製品，瓦や焼けた壁土等が出土しています。

これまでの調査によって近世の町屋跡が確認され，遅くとも 18 世紀から人々がこの地に住んでいたことが明らかになりました。また，地面が火を受けた痕跡を広い範囲で確認したことから，大規模な火災があったものと推定されます。なお，一部では複数回の火災があったようです。 焼けた壁土が詰まった穴は，火災のゴミを入れた穴と思われます。このうちの一つの穴から，**「丙午弘化三年四月吉日」**（1846 年）と刻まれた硯が，水滴とともに出土しました。硯の購入日を記したものと推定されることから，この火災は 1846 年以降にあったものと考えられます。

大竹市史によると，近世小方村であった２度の大きな火災が記されています。ひとつは，1754 年に片側町で６軒の家が焼けた火災，もうひとつは第２次長州戦争（1866 年）で小方村の 286 軒の家が焼けた火災です。（調査区は，片側町にあたります）

以上のことから，発掘調査により確認された火災の痕跡は，第２次長州戦争によるものがほとんどと思われます。



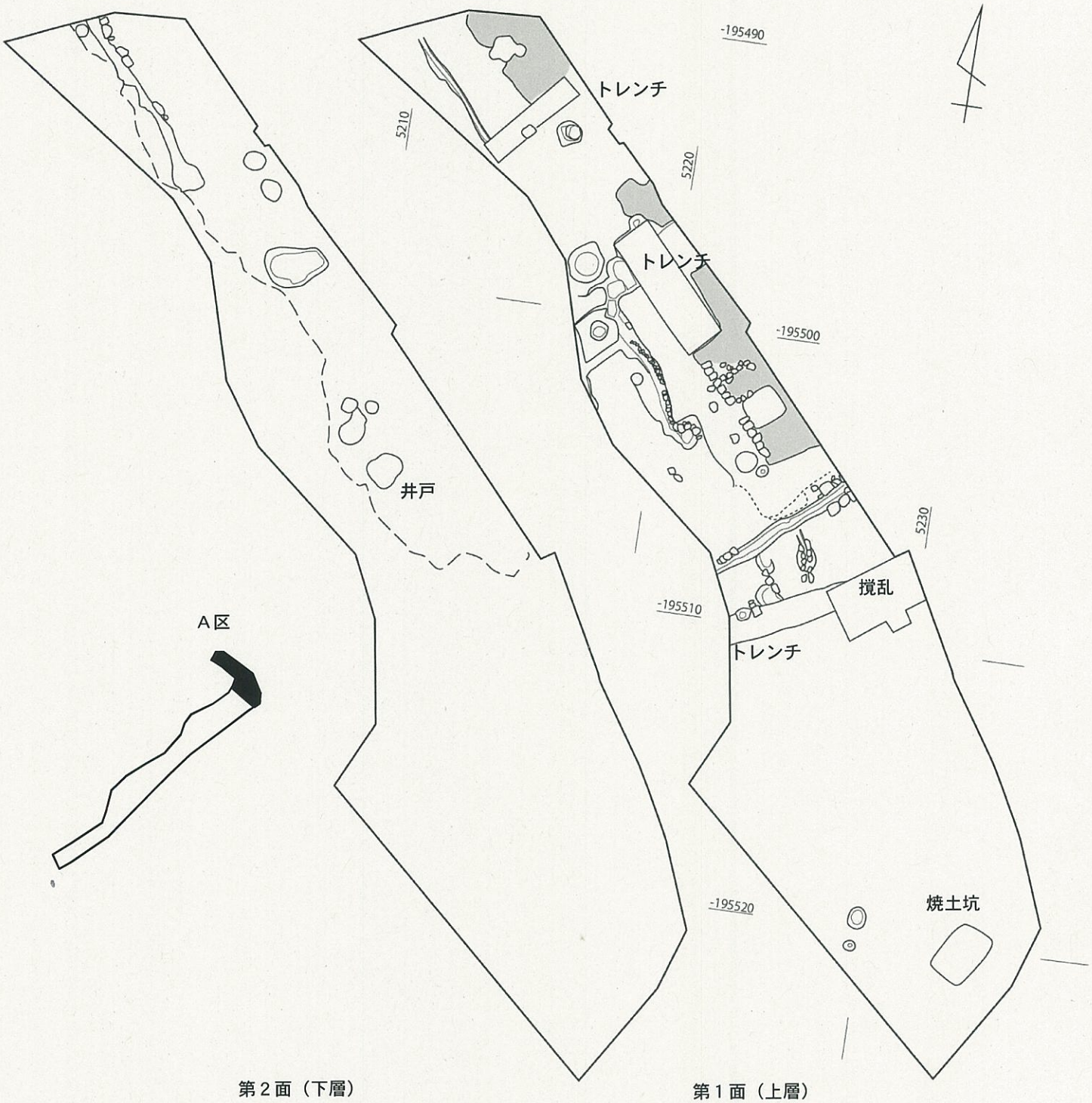
第１図　亀居城跡周辺地形図（１：50,000 大竹）

＊大竹市教育委員会『芸州亀居城跡―第１・２次発掘調査報告』1980 年　３頁から転載

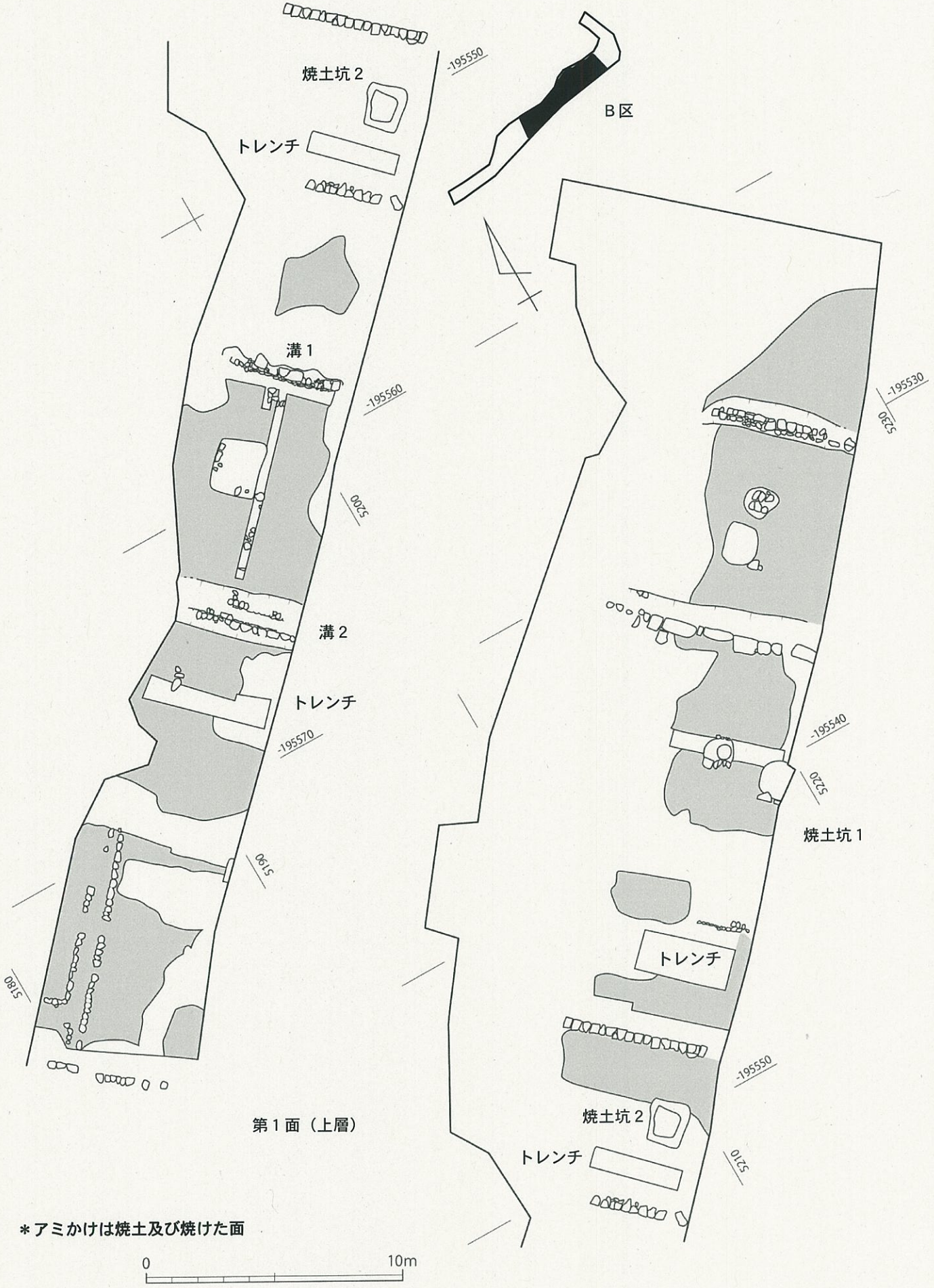
第２図　亀居城跡全体図（１：5,000）

＊大竹市教育委員会『芸州亀居城跡―第１・２次発掘調査報告』1980年　５頁から転載

1.本丸　2.二の丸　3.三の丸　4. 有の丸　5.（五郭）　6.（六郭）　7.（七郭） 8.詰の丸　9.鐘の丸　10.妙見丸　11.第１号井戸　12.第２号井戸　13.北櫓　14.大手門 15.桝形　16.堀　17.石垣　18.当時の推定海岸線

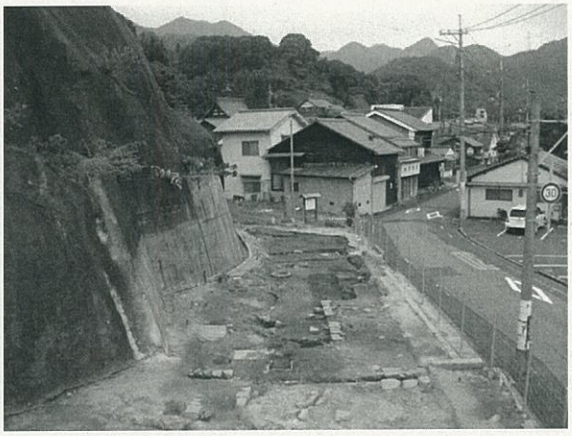


第３図　Ａ区遺構配置図（１：200）



第４図　B区第１面（上層）遺構配置図（１：200）

調査区遠景　南西から



Ａ区完掘状況（第１面）　南東から

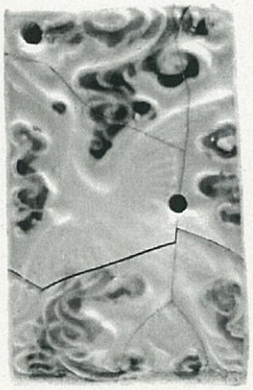
Ａ区完掘状況（第２面）　南東から

Ｂ区完掘状況　南西から

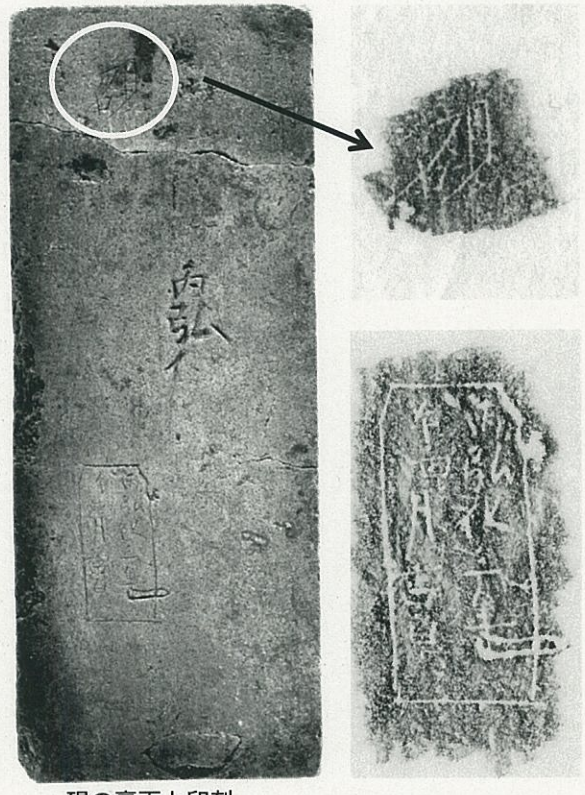
Ａ区焼土坑　北東から

Ｂ区焼土坑　北西から

B区焼土坑から出土した硯と水滴



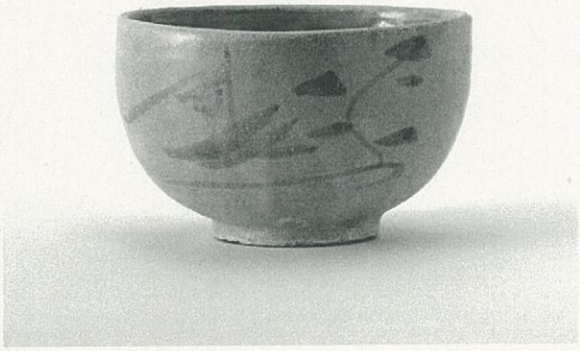
水滴



硯の裏面と印刻

A区焼土坑から出土した燈明皿

A区第２面井戸から出土した磁器碗



B区溝１から出土した磁器碗

B区溝２から出土した磁器碗